岐阜経済大学論集 34 巻 4 号（2001 年）

シェフレとその時代的意義

――「資本主義」語のはじまり（6）――

重　田　澄　男

はじめに
I. シェフレ
1. 人物と社会的活動
2. 主要著書
3.『資本主義と社会主義』について
II. シェフレとマルクス
1. シェフレのマルクス評価
2. マルクスのシェフレ評価
III. シェフレの過渡的先駆性
1. 時代状況
2. 人物評価
3. 過渡的先駆性

はじめに

現在では近代社会の経済システムや社会体制を表現する日常語として使われている「資本主義」という用語は，いつから，誰が使いはじめたものであるのか。

「資本主義」という言葉そのものは，1850 年前後の時期に，ピエール・ルルーやルイ・ブランやサッカレーなどによって使われはじめたものであるが，この時期における「資本主義」という言葉は，「資本」や「資本家」の行動や機能のありようを表現する言葉として使われており，現在使われているよ

うな近代社会の体制やシステムをしめすものとしては使われていない。

そのような「資本主義」という用語が，近代社会の経済システムや社会体制をしめすものとしての概念内容をもつようになるにあたっては，マルクスの資本主義概念が重要な役割を果たしたようである。

だが，マルクスには，基本的には「資本主義 Kapitalismus」という用語は存在していない。『資本論』時点におけるマルクスの資本主義概念をしめす用語は「資本家的生産様式 kapitalistische Produktionsweise」である。この近代社会における経済諸関係の特有の歴史的形態をしめすという性格と意義をもつ「資本家的生産様式」なるマルクスの資本主義範疇が，現在使われている「資本主義」という用語へと繋がっていくことになる。

マルクスが『資本論』第1巻を出版した1867年の3年後，歴史学派に近い立場にたちながら近代的労働者問題と社会主義にたいして積極的な関心をもったシェフレが，『資本主義と社会主義』(1870年) を出版し，そのなかで「資本主義」という用語をくりかえし使用し，書名にまで「資本主義」という用語を組み込んでいる。

シェフレは，その『資本主義と社会主義』において，近代社会の経済構造の基本的内容を「資本主義」という用語によって表現しながら，その内容を経営組織や諸個人の「社会的な結合形態」としてとらえている。

近代社会の経済システムや社会体制をそのようなかたちでとらえる「資本主義」という用語の使用をおこなったシェフレという人物と，その著書『資本主義と社会主義』の概要について瞥見し，その時代的意義を明らかにすること，それが本稿の課題である。

シェフレの『資本主義と社会主義』における「資本主義」用語の使用状況とその内容についての検討は，稿をあらためておこなうことにする。

I. シェフレ

1. 人物と社会的活動

シェフレ（Albert Eberhard Friedrich Schäffle, 1831–1903）は，1831年2月24日，南ドイツのシュツットガルト近くのニュルティンゲンに生まれた。1848年，テュービンゲン大学に入り，当初は神学を学んだが，1850年から1855年まで『シュヴァービッシェン・メルクール』（*Schwäbischen Merkur*）誌の編集部に入り，ジャーナリストとしての業務のかたわら同大学で国家学を学び直し，1856年に博士号を得て研究協力者となり，1860年テュービンゲン大学の国家学講座の担当者となる。

1961–65年にはヴュルテンベルク（Baden-Württemberg州の東部地域）州議会の大ドイツ議員となり，1868年には関税議会の議員となる。

1868年，ウイーン大学に教授として就任。1871年2月にオーストリアのホーエンヴァルト内閣に商務大臣として入閣したが，同年10月内閣の瓦解とともに辞任。1872年以後は，生地に近いシュツットガルトにおいて，在野の学者，ジャーナリスト，『総国家学雑誌』（*Zeitschrift für die gesamte Staatswissenschaft,* 1892–1903）の編集者として過ごした。1903年12月25日，シュツットガルトにて死亡。

シェフレは，社会学の分野では，社会有機体説の立場をとり，生物有機体との比喩を用いて社会現象を解明し，主著『社会体の構造と生活』（4巻，1875–78年）において自然科学と社会科学との総合的体系をえがき，19世紀末のドイツ社会学に持続的な影響を及ぼした，とのことである。

財政学の分野では，シェフレはドイツ財政学の創始者の一人としてシュタイン，ワーグナーとならんで19世紀後半期における三大巨人[1)]として評価

されており，『租税政策の原理』（1880 年）や『租税』（1895 年）などの著書で知られている。彼は，公共的財政は，年次的にではなくて，景気循環の経過においてバランスをとるべきであるとした。経済学の分野では歴史学派に近く，改良資本主義を理想とした。

また，彼は，社会主義について理論的に論じた最初の国民経済学者の一人であって，『社会主義の精髄』（1874 年）は 1919 年までに 16 版を重ねている。

なお，遺稿として，『わが生涯』（2 巻，1905 年）および『社会学概要』（1906 年）が出版されている。

2. 主要著書[2)]

1. *Die Nationalökonomie oder allgemeine Wirtschaftslehre. Für Gebildete aller Stände, insbesondere für den Kaufmann, sowie zum Gebrauch in Akademien, Handels- und Realschulen gemeinfaßlich dargestellt.* Leipzig, 1861.（306 S.）『国民経済学あるいは一般経済理論』
2. *Das gesellschaftliche System der menschlichen Wirtschaft. Ein Lehr- und Handbuch der Nationalökonomie.* Tübingen, 1867.（584 S.）『人間経済の社会的システム』
3. *Die nationalökonomische Theorie der ausschließenden Absatzverhältnisse, insbesondere des literarisch-artistischen Urheberrechtes, des Patent-, Muster- und Firmenschutzes, nebst Beiträgen zur Grundrentenlehre.* Tübingen, 1867.（286 S.）『排他的販売――とくに文学的・芸術的著作権――の経済理論』
4. *Kapitalismus und Socialismus mit besonderer Rücksicht auf Geschäfts- und Vermögensformen: Vorträge zur Versöhnung der Gegensätze von Lohnarbeit und Kapital.* Tübingen, 1870.（732 S.）『資本主義と社会主義，とくに営業的および資産的形態に顧慮して：賃労働と資本との対立の宥和のため

の講義』

5. *Die Quintessenz des Socialismus.* Gotha, 1874.（69 S.）『社会主義の精髄』
6. *Bau und Leben des sozialen Körpers;* 4 Bde. Tübingen, 1875–78.（847, 498, 575, 538 S.）『社会体の構造と生活』4 巻。
7. *Die Grundsätze der Steuerpolitik und die schwebenden Finanzfragen Deutschlands und Österreichs.* Tübingen, 1880.（658 S.）『租税政策の原理および懸案のドイツとオーストリアの財政問題』
8. *Die Inkorporation des Hypothekarkredits.* Tübingen, 1883.（159 S.）『抵当権信用の併合』
9. *Die Aussichtslosigkeit der Sozialdemokratie: drei Briefe an einen Staatsmann zur Erganzung der "Quintessenz des Socialismus".* Tübingen, 1885.（112 S.）『見込みなき社会民主主義』
10. *Deutsche Kern- und Zeitfragen.* Berlin, 1894.（472 S.）『ドイツの中心問題と時事問題』
11. *Die Steuern.* Leipzig, 1895.（420 S.）『租税』
12. *Ein Votum gegen den neuesten Zolltarif.* Tübingen, 1901.（232 S.）『新関税率への反対意見』
13. *Aus meinem Leben;* 2 Bde. Berlin, 1905.（255, 257 S.）『わが生涯』2 巻。
14. *Abriss der Soziologie; herausgegeben mit einem Vorwort von Karl Bucher. — H. Laupp'schen Buchhandlung,* Tübingen, 1906.（252 S.）『社会学概要』

＊〔初版など古い時期においては，z ではなく c を使って Socialismus や social というスペルになっている。〕

3.『資本主義と社会主義』について

シェフレの『資本主義と社会主義』は，その書名からイメージされるような資本主義的経済体制と社会主義的経済体制との制度的な比較検討をおこ

なった著作ではない。

それは「I. 科学的基礎概念の発展」「II. 社会主義の歴史批判とその科学的代表者たち」「III. 社会主義の主要概念の評価. 経済的結合形態の比較. 資本主義の位置」という3篇構成からなるものであって，その基本的内容は，いわば資本主義経済の基礎理論とそれにたいする社会主義者の批判的見解についての検討であり，そのような視角からの資本主義的経済構造についての理論とでもいうべきものである。

近代社会の経済構造についての理論的解明というその基本的内容は，3年前の1867年に出版された『人間経済の社会的システム』で明らかにした内容にもとづき，社会主義者による近代社会の経済システムにたいする批判の検討をつうじてさらにそれをより発展させるという新たな取組みをおこなった著作とみることができるものである。

そのことを，シェフレは，『資本主義と社会主義』の序文において，「わたしの以前の著作に精通している人は，この本のなかにわたしの，より古い基本的見解を再発見するであろう」[3]と指摘し，また，遺稿としての自叙伝『わが生涯』においても，「〔『資本主義と社会主義』は，〕1867年に出版された国民経済の第2版，それは『人間経済の社会的システム』という特別の書名がつけられているが，それを基盤として，より一層科学的におしすすめられた」[4]ものである，と述べているところである。

なお，この『人間経済の社会的システム』は，1861年に出版した『国民経済学あるいは一般経済理論』を全面的に増補改訂したものであって，この『人間経済の社会的システム』の扉にわざわざ「まったく新しく手を加えられ著しく増補された第2版」と記されており，さらに，『国民経済学あるいは一般経済理論』の「序文」を，一部省略しながら「第1版の序文から」として掲載し，さらに新たな「序文」を「第2版への序文」として付け加えて，そのなかで「こうして世に出す第2版は，ほとんど全パラグラフにわたって第1版の変更をふくんでおり，その結果，本書は大部分がまったく新

しい内容となっている」[5]と指摘しているところである。

この『人間経済の社会的システム』について，斉藤悟郎氏は，「シェフレの主著『人間経済の社会的システム』……は，（A）私経済的体系，（B）共同経済的体系，（C）世界商業および国際法生活，という3体系よりなるが，第3のものには，第1および第2のシステムが織りこまれているのであるから，主要なる区別は，私経済的と共同経済的という2つの体系にある」[6]とされており，木村元一氏は，「シェフレは，1867年の『人間経済の社会的システム』第2版で，共同経済と市場経済を対照し，非常に鋭い議論を展開したが，その後の版および他の著書では，たんなる有機体主義に転落してしまった。シェフレは，通常の見解，すなわち，私経済の自由交換原理によって結合せる資本主義組織を，国民経済の全体と考える見解に反対し，私的資本主義を補完する共同経済組織の存在を強調した上に，国家経済でも経済原理が妥当するということを正しく認識した……」[7]とみなされている。

たしかに，シェフレは，『資本主義と社会主義』においては近代社会の経済的システムの基軸的内容を「資本主義」という用語でもって社会的「結合様式」に論点を絞ってとらえようとしているが，しかし「私的資本主義を補完する共同経済組織の存在」について無視してはいない。

ところで，大河内一男氏は，シェフレの『資本主義と社会主義』について次のように指摘されている。

「アルベルト・シェフレ Albert Schäffle（1831–1903）の通俗的解説書『資本主義と社会主義』は，労資協調思想の伝播に大きな役割をつとめ，また後にブレンターノ的改良主義の立場に改宗した哲学史家ランゲ F.A. Lange（1828–1875）は，その初期の労働者問題論においてきわめて急進的な理論を展開し，かつ J.S. ミルの批判をおこなっていた。しかしながら以上の諸論述は，いずれも「独逸マンチェスター派」との直接の論争の対象となることなくして終った。」[8]

すなわち，大河内一男氏は，シェフレの『資本主義と社会主義』を，「労資協調思想の伝播に大きな役割」を果たした「通俗的解説書」とみなしながらも，ランゲ（Friedrich Albert Lange, 1828–75）の小冊子『労働者問題』（『労働者問題，現在と未来にとってのその意義』F.A. Lange, *Die Arbeiterfrage: ihre Bedeutung für Gegenwart und Zukunft*, Duisburg, 1865.）と並べて，社会問題を自由放任主義的に市場原理にまかすべきであるとする「ドイツ・マンチェスター派」に対峙する論議をおこなった問題提示的著作であることを指摘しつつ，しかし，それは結局のところ「直接の論争の対象となることなくして終った」とされているのである。

だが，そのような論議は，その後，社会政策学会に結集した講壇社会主義者たちによって積極的に展開されることになるのであって，大河内氏が指摘されているように，近代的労働問題への取組みということそれ自体はシェフレの時代的課題にたいする先駆的問題意識をしめしているところである。

その点について，シェフレ自身も，『資本主義と社会主義』のなかで取り組んでいる社会問題，すなわち，資本主義の発展のなかで不可避的に生みだされてくる近代的な労働者問題と，それと関連して展開される社会主義の理論と運動について，その当時すでに「“プロレタリアート”はウイーンにおいてもかなり積極的に活動を始めていた」が，しかし「いわゆる知識階級の大部分は，“労働運動”の意義についても，また共産主義，社会主義および社会民主主義におけるそのプログラム的定式についての理解もまったくもっていなかった」[9]と述べている。

そのような状況のなかで『資本主義と社会主義』を出版するにあたって，シェフレが提示した見解の内容とそれにたいする社会的反応について，シェフレ自身その「序文」のなかで，次のように予測している。

「わたしは，まともに得られた財産を一銭も問題にしなかったし，近代の自由な権利のいかなる後退もおこなわないことを勧めたけれども，急進的

で国家的な危険人物の一人とみられるであろう。というのは，わたしは社会主義の理論家にたいする道義的憤慨をほんの少しも爆発させず，現存社会の疾患については遠慮なく語ったからである。だが，他方では，わたしは十分すぎるほどに保守的なものとして通用するであろう。というのは，わたしは現存の経済的社会組織の全面的で急激な粉砕については救いをまったく認めることができないし，また，現実の社会主義的急進主義に反対して新たな研究の成果としての新しい根拠を対置しているからである。」[10)]

『資本主義と社会主義』の出版がひきおこした実際の反響について，30年以上も後に書いた自叙伝『わが生涯』において，シェフレは次のように述べている。

「『資本主義と社会主義』は1870年に出版された。……〔だが，〕1870年の〔プロイセン・フランス〕戦争が，公衆の注目を確実にのみ込んでしまった。しかし，1871年2月にホーエンヴァルト〔内閣〕の省〔の大臣〕に任命されたとき，本書は最大の注目をひき，大資本と大土地所有の階層に部分的ながら恐怖をひきおこした。この恐怖は，教養ある有産階級の多くが当時の社会主義的な時代思潮の内容と性質についてなんらの考えももっていなかったということによってのみ，確実に説明されうるところである。……燃えたぎった社会政策と社会革命的な潮流の約30年の後の現在では，本書の諸々の事態については大部分が承認されている。しかしながら，当時においては，それは驚天動地のこととみえたのである。」[11)]

そのように，シェフレの『資本主義と社会主義』が出版された1870年は，プロイセン・フランス戦争が始まった年であり，つづく1871年はプロイセンの勝利とドイツ帝国の成立，そして敗北したフランスにおけるパリ・コミュー

ンの成立と壊滅の年でもあった。

『資本主義と社会主義』が出たのはまさしくそのような政治的激動の年であり，パリ・コミューンという社会主義運動にとっての激烈な爆発的展開とそしてその恐怖が全ヨーロッパの有産階級のあいだに拡がったときであった。

そのような時代的激動の時期に『資本主義と社会主義』は刊行されたが，それはその後しばらく再版されなかった。そのことについてシェフレは「わたしはそれを新しい版にする時間を見いだすことなく，長いあいだ絶版になっていた」[12]と述べている。第2版が出たのは8年後の1878年のことであったが，それはビスマルクによる社会主義者鎮圧法が公布された年であった。

II. シェフレとマルクス

1. シェフレのマルクス評価

シェフレは，『資本主義と社会主義』のなかで，社会主義者の見解についての世上一般の無知あるいは過小評価を，「人は，マルロ，マルクス，ラサール，プルードンを――それらをほとんど読んでいない――過小評価している」[13]と指摘している。

シェフレは，『資本主義と社会主義』の序論的導入部分たる第1講において，まず，現存社会にたいする社会主義者の批判と要求は何であるかという基本的論点を問題にしながら，「所有とは盗みである」という衝撃的な警句でもって世を震撼させたプルードンと，ドイツ労働者の“予言者”であり，あるいは恐怖と嫌悪の的としての悪魔とされているラサールの「現代の所有は異国状態にある」といった指摘に触れたうえで，マルクスについて取りあげ，「持続的に“他人労働の剰余価値を吸収する”ところの――スポンジと

しての資本については，ドイツの社会主義者のなかでは才知にたけ，博学でもあるカール・マルクスがもっとも徹底的におしすすめた見解をしめしている」[14]と指摘している。

当時のドイツにおいては，労働組合の組織者としても，社会主義者としても，ラサール（1864年に死亡）の名声がきわだって高く，マルクスについてはドイツ国内ではその著書や理論はほとんど知られていない状況であったが，そのなかで，シェフレは，ラサールとマルクスとを比較しながら，次のようにマルクスに高い評価を与えている。

「古い“社会”思想から生き生きとした大衆運動への転換のためには，ドイツにおいては，2人の人物が，すなわち，精神，勇気，および並はずれた重要性をもった広い教養が見いだされるところの，カール・マルクスとフェルディナンド・ラサールが，貢献している。後者（ラサール）は，はるかによく知られた名前であるけれども，しかし，わたしは彼よりも先にカール・マルクスの名前を挙げる。ラサール自身は，用語法にいたるまで大部分について批判的思想をマルクスから借用しているのである。」[15]

シェフレは，ラサールについては，『資本主義と社会主義』以前においても，1863年に「シュルツェ・デーリッチュとラサール」（“Schulze=Delitzsch und Lasalle”）という論文を書いているし[16]，また1867年に大幅に増補改訂した『人間経済の社会的システム』のなかでもラサールにたいする言及がなされている。しかし，マルクスについては取りあげていない。

それが，『資本主義と社会主義』においては，マルクスについての言及が急に大量になされているのである。

おそらく，シェフレは，1867年の『人間経済の社会的システム』の出版後の3年のあいだに1867年に出版されたマルクスの『資本論』第1巻を読み，その内容にたいしては批判的ながらも大きな感銘を受けて，マルクスの

諸著書に急遽取り組んだものと思われる。

シェフレは，「カール・マルクスの私生活と性格についてはわたしは知らない。だが，その著作は，真面目な研究であるのみならず，自主的でかつ不屈の原則があることを証明している」[17]と述べながら，「カール・マルクスは，その著書『資本論』において，それは現在までのところ第1部のみが出ただけであるが，とくにイギリスの経済学的文献についての類まれな知識をもっており，才気があり，多面的な歴史的・哲学的および古典的教養のある人物であることを証明している」[18]と高く評価している。

そして，マルクスは「長期にわたってイギリスに住み，そこでの労働運動と労働者の状態を熟知しており，イギリスの経済学文献，そこでの工場立法とそして労働者状態についてのイギリスの調査の結果をくわしく知っているので，カール・マルクスは，おそらく他のドイツの経済学者の誰よりも，ドイツの労働者大衆に社会民主主義意識を植えつけるのにとくに適している」[19]と紹介している。

さらに，マルクスの著書等については次のように述べている。

「マルクスによるもっとも重要な著作は『資本論．経済学批判』という書名でもって出版されている。“資本の生産過程”が取り扱われている第1部のみがこれまでに出版されている。“資本の流通過程”および“総過程の諸姿態”は第2部に，経済学の歴史は第3部であたえられるであろう。マルクスの以前の著作としては，プルードンの貧困の哲学に反対して書かれた『哲学の貧困』，および，『経済学批判，1859』がある。この後の方の著作は，内容的には資本についての主著でくりかえされている。……マルクスによるパンフレットとアジテーション・プログラムについては，これはまったく手に入れることができなかった。」[20]

なお，シェフレは，ラサールとの対比だけでなく，さらにプルードンとも

比較しながら，「マルクスは，プルードンがそこ〔『貧困の哲学』〕でヘーゲルについて言及する以上に，さらに熟達したかたちでヘーゲルの弁証法と方法を取り扱っている」[21]としている。

そして，『資本主義と社会主義』の第11講では，そのほとんどをマルクスの見解の検討にあてている。

ところで，シェフレがそのように『資本主義と社会主義』のなかでマルクスの『資本論』を大きく取りあげた1870年時点のドイツでは，マルクスの理論はほとんど知られていなかったようである。

マルクス主義理論家の中心人物として後にドイツ社会民主党の党首となるベーベル（August Bebel, 1840–1913）が自叙伝のなかで述べているところによると，「マルクスの『共産党宣言』およびその他の著作は60年代の終わりから70年代の初め頃，ようやく党に知られるようになった」[22]ものであり，マルクスの理論は60年代までドイツ国内ではほとんど遮断されていて，海外の亡命者のなかで息づいている程度にすぎなかった，といわれている。

ベーベル自身，1873年3月に投獄されて1875年4月に釈放されるまでの2年間を獄中で過ごすなかで，初めてマルクスの『資本論』第1巻やエンゲルスの『イギリスにおける労働者階級の状態』などを読み，社会主義運動の指導者としての理論的素養を身につけることができた，とのことである。

2. マルクスのシェフレ評価

ロンドンに在住していたマルクスが1870年9月10日付けでエンゲルス（在マンチェスター）宛てに出した手紙の〈追伸部分〉に，次のようなことが書かれている。

「ついでだが！ テュービンゲンのシェフレ教授が僕に反対してばかげた厚い本（値段は12シリング半！）を著した。」[23]

『資本主義と社会主義』の「序文」は「1870年6月」の日付けがつけられているので，その出版の数カ月後のことである。

この1870年9月10日という時点は，プロイセン・フランス戦争の真最中であって，このマルクスの手紙のなかでも，マルクスが書いた「フランス・プロイセン戦争についての国際労働者協会総評議会の第2の呼びかけ」についてや，エンゲルスの「戦況時評」〈16〉〈17〉における「パリの要塞工事とシュトラスブルクの砲撃とについての論説」などが問題にされている。

その手紙にたいして，エンゲルスは，2日後の9月12日に，さっそくマルクスへの返事を書いている。

その返事のなかで，エンゲルスは，予測されるパリ・コミューンの決起についての危惧を述べていて，「彼ら〔パリの労働者たち〕はふたたび外国からの圧力のもとにうかつにも心を奪われて，パリへの襲撃の前夜に社会的共和国を宣言するのではないだろうか？ もしドイツ軍が最後の戦闘行動としてパリの労働者たちにたいするバリケード戦をたたかい抜かなければならないというようなことになれば，それは恐ろしいことだろう。それはわれわれを50年以前に投げかえすことになるだろう」と書いている。

ところで，その返事のなかで，エンゲルスは，シェフレの本の書名についてマルクスに聞きかえしている。

「シェフレの本の題名はなんというのか，たぶん君は知らせてくれることができるだろう。そこには君のほんとうの敵があるのだ。この男は関税議会のなかにいた。そして一個のまったく平凡な俗流経済学者で，すでにより多くファウハー*なのだが，しかしシュヴァーベン人**なのだ。その本では君は喜びを味わうことだろう。……」[24)]

*〔Faucher，唸りまくる人？〕 **〔ライン方言で「分別のないもの」という意もある〕

それにたいしてマルクスは，さらに2日後の9月14日付けのエンゲルス

宛ての手紙の〈追伸〉において，「シェフレの本の題名は，『資本主義と社会主義うんぬん』というのだ」[25]と書きしるしている。

ところで，そのあとのマルクスとエンゲルスとの往復書簡のなかにはシェフレの『資本主義と社会主義』についての言及はまったくみられない。それどころか，両者のあいだの手紙のひんぱんなやりとりそのものがなくなってしまっている。

というのは，その1870年の9月18日頃に，エンゲルスはマンチェスターからロンドンに移住してきて，マルクスの家から10分ほどのところ（リージェント・パーク・ロード122番地）に住まいを構え，マルクスとはほとんど毎日会って意見を交わすようになる。そのため，2人のあいだに手紙のやりとりの必要はなくなるのである。

しかもこの時期，マルクスは国際労働者協会（第1インターナショナル）の仕事に没頭しており，それもプロイセン・フランス戦争にたいする第1インターの対応や，それにつづくパリ・コミューンにたいする行動について取り組んで，多忙をきわめていたようである。その後も，1872年の第1インターのハーグ大会におけるマルクス主義者とバクーニンら無政府主義者との対立の激化による第1インター総評議会のニューヨークへの移転と解散，加えて，『資本論』第1巻の大幅な手直しによる第2版の出版への取組み，フランス語版の校閲，『資本論』第2巻のための資料の検討，等々と，まったく暇のない日々を過ごしており，シェフレのあの膨大でまとまりの悪い『資本主義と社会主義』にゆっくりと取り組む余裕はなかなかなかったものと思われる。

マルクスによるシェフレの『資本主義と社会主義』についての言及は，その8年ほど後に書かれた「アードルフ・ワーグナー著『経済学教科書』への傍注」においてやっと見いだされることになる。

この「傍注」は，マルクスが1879年後半から1880年11月までに抜粋ノートに書いたもので，『経済学教科書』の第1巻として刊行されたアード

ルフ・ワーグナーの著書『一般的または理論的経済学，第1部，原論』改訂増補第2版（1879年）にたいするものである。そのなかで，マルクスは，『資本論』で展開された価値論にたいするワーグナーによる歪曲を批判して，自分の経済理論の基本命題をかさねて説明している。

マルクスは次のように述べている。

「私はたとえば労働力の価値の規定にあたっては，その価値が現実に支払われるということから出発しているが，これは実際にはそうではないのだ。シェフレ氏は『資本主義』うんぬんのなかで，この点をとらえて「気前がいい」とかそれに類することをいっている。彼がここであてこすっているのは，科学的に必要な手続きにすぎないのだ。」[26)]

マルクスは，『資本論』第2巻のなかでも，ほぼ同様なことを述べている[27)]。

ともあれ，どうやらマルクスとエンゲルスとは，シェフレの諸著作については，まともに理論的に取りあげる必要のない杜撰（ずさん）な内容のものと判断したようである。

そのことは，1881年2月1日付けのエンゲルスよりカール・カウツキー宛ての次のような手紙がしめしている。

「たとえばシェフレひとりで何冊ものあの分厚い著書にまとめている，恐るべきたわごとにいちいち反論するだけでも，まったく時間の浪費だと私は考えます。これらの諸公が括弧づきで引用している『資本論』からのまちがった引用文のすべてを訂正しようとするだけでも，すでにかなり大きな一冊の本になるでしょう。彼らは，人に彼らの質問に答えてほしいと要求する前に，まず読んだり書き写したりすることを習うべきなのです。」[28)]

そして，マルクスとエンゲルスとは，シェフレが『社会主義の真髄』のなかで，自分は何年間もついやして『資本論』第1巻を理解しようとした，と述べているのを取りあげて，次のようなからかい半分の冷やかしの意見を述べているほどである。

「これまでの「批評」やいわゆる「学問」は，「全般的な没判断」をさらけだしたばかりで，この点ではマルクス自身がいちばんおもしろがっていたのです。私はシェフレ氏の窮余のためいき――自分はもう10年間も『資本論』を研究したが，いまだに理解しきれない，といったためいきのことをおもしろがっているマルクスの姿がまだ目にみえます。」[29)]

III. シェフレの過渡的先駆性

1. 時代状況[30)]

シェフレの『資本主義と社会主義』が出版された1870年は，ドイツにおいては，社会思想の流れや経済学界の動向においても，大きな転換を迎える時期であった。

1860年代のドイツの経済学の世界は，自由放任主義的な「ドイツ・マンチェスター派」が支配していて，社会問題はほとんど問題にされないままであった。

ドイツにおいて自由主義的な経済思想が自己主張を始めたのは，「ドイツ・マンチェスター派」と呼ばれる人たちが〈ドイツ経済人会議〉に結集した1858年頃からであり，その「ドイツ・マンチェスター派」の運動および理論が頂点に達したのは，1868年の自由主義的営業条例においてであった。

これら自由主義的経済思想にとっての主要な関心事は，営業の自由と貿易

の自由であり，統一産業立法の制定，信用制度の完備，鋳貨制度および度量衡の統一などであった。労働者問題にたいしては，彼らは，労働者の社会的地位の改善ないし救済といった労働者保護についてはまったく無関心で，社会問題を規制する力としては市場原理による「自然法則」にまかせる以外にはなにもないと考えていた。

そのような状況のもとで，ドイツの労働者階級がラサールによって政治的に初めて組織されたのは1863年の〈全ドイツ労働者協会〉の結成においてであり，1860年代のドイツにおける経済学者たち大部分にとっての社会問題への関心は，もっぱら社会主義にたいする批判とりわけラサールにたいする反対に向けられていた，とのことである。

そのような1860年代のドイツにおいて，近代的な資本家的企業における労働者問題のもつ重要性に気づき，社会主義の理論と運動の提起に積極的な関心をしめした経済学者は，シェフレ，ロードベルトゥス，エンゲル，ウィンケルブレッヒ等，きわめて少数の例外的存在のみであった，といわれている。

大河内一男氏によれば，「1872年以前において，社会問題にたいする思想を提示した唯一のものはロードベルトゥスを指導者と仰ぐ少数の“Sozialkonservatismus”の代弁者のみであった。……この「保守的」社会思想は，ワーグナー，シェフレ，ショーンベルク等の社会政策学者をつうじてドイツの社会政策思想に影響を与えたのであるが，しかもかかる保守党的な「国家社会主義的」社会改良論の萌芽は順調に発育するにはいたらなかった」[31]とされている。

シェフレが『資本主義と社会主義』を世に問うた1870年は，ドイツにおいては，まだ「ドイツ・マンチェスター派」の時代とされている時期であって，歴史学派の経済学者たちによって「社会政策学会」が創立される1873年より以前のことであった。

2. 人物評価

では，ある意味では時代的転換を先駆的に体現していたともいえるシェフレの人物とその学問的業績は，いかなる評価をされているのか。

シェフレにたいするマルクスやエンゲルスの評価は，きわめて手厳しい。1881年3月12日付けのベルンシュタイン宛ての手紙のなかで，エンゲルスは次のようにいっている。

「ビスマルクのような，理論的にはこのように不条理で，実践的にはこのようにむら気なやつのするなにごとかから，現代社会の破産宣告を読みとることなど，二度とふたたびやってはいけません。……シェフレ流の「考える人たち」のたわごとからもそうです。この連中の「考えていること」（彼らが「考えている」こととといえば，おそらくそれに尽きる）は，現代社会に破産を宣告することではけっしてない。それどころか，彼らは，まさに現代社会を再度しかるべくつぎはぎしようとすることだけで暮らしをたてているのです。」[32)]

さらに，ドイツ社会民主党の理論家フランツ・メーリンク（Franz Mehring, 1846–1919）は，『ドイツ社会民主主義史』のなかで，シェフレの人物像について次のように述べている。

「シェフレは，政治的に，はなはだはっきりしない人物で，かつてはシュバーベンの地方分権主義的民主派のプロイセン嫌いであり，ついでオーストリアの封建的内閣で商業大臣をつとめ，最後にビスマルクの慈善社会主義の助言者となったが，ランゲがよく理解していた労働運動の歴史的正当性をまったく理解しなかった。かれは科学的共産主義を，資本家的価値観

念にもとづいて生産手段の社会化を行なおうとするユートピアの体系と考え，多くの話にならない誤解におちいっていた。しかしシェフレの真の功績，1874年には真の功績であったものは，ブルジョアジーがいわゆる社会主義的「分配者」よりも優位に立つための手段と信じている「標語，瞞着，情熱，偏見，錯覚，および中傷の人を荒廃させる影響にたいして」公然と反対したことである。シェフレは，生産手段の社会化を，達成されることのきわめて疑わしい目標であるとしながら，しかもこの社会化は，もしそれが可能ならば，「この世で最善のもの」である資本主義的私営企業よりもはるかにすぐれたものになろう，と指摘している。かれの論証は，ランゲのそれと同じく，ブルジョア的イデオロギーに多少の影響をあたえた。しかし，この影響がどうにか拡大され深化されようとするよりも早く，新帝国の使者や予言者が騒がしく登場して，愛国者たちの耳を聾してしまった。」[33)]

また，大河内一男氏は，シェフレの経済思想の特徴について，講壇社会主義者の右派の代表者ワーグナーと比較しながら，次のように指摘されている。

「ワーグナーをロードベルトゥスとの相似において理解することよりも，シュナイダーがなせるごとく，彼をシェフレとの相違において理解せんとする方法がはるかに賢明である。なんとなれば，両者のあいだにはプロイセントゥムと南ドイツ的自由主義との対立は存したとはいえ，シェフレの「浄化された資本主義」“der veredelte Kapitalismus”の主張はワーグナーの「国家社会主義」的「共産主義」と類似の要求を含むものだからである。ただシェフレはワーグナーに比してはるかに自由主義的かつ妥協的であった。ワーグナーが強制的「協同経済」を希望したのにたいしシェフレは自由な「協同経済」，協同組合経済をいっそう希望したということができる。

二つのものの差異はたんに量的なものにすぎなかった。」[34)]

このように，大河内一男氏は，シェフレは国家社会主義者あるいは保守的社会主義者とされているワーグナー（A.H.G. Wagner, 1835–1917）よりも自由主義的かつ妥協的な性格をもった「保守党的な「国家社会主義的」社会改良論」[35)]者であって，その社会的立場は自由な協同経済あるいは協同組合経済としての改良資本主義を理想とした経済思想家であった，とされているのである。

ところが，シェフレは，「社会政策学会」と絶縁したビスマルクによる1878年施行の社会主義者鎮圧法と一体の，国家による上からの労働者の保護・懐柔としての慈善的社会政策についての助言者となるなど[36)]，いわゆる「社会政策学会」における「講壇社会主義者」たちよりもより体制寄りの行動をとったりもしている。

3. 過渡的先駆性

そのように，シェフレについての評価は，マルクスやエンゲルスによる評価も，メーリンクによる評価も，大河内一男氏による評価も，概して低いようであり，その評価にあたって指摘されている事実や特徴も指摘のかぎりはそのとおりである。

しかしながら，大きな転換的局面におけるドイツにあって，過渡的時代の先駆的理論家としての意味においては，シェフレはそれなりに評価していい存在ではないかと思われる。シェフレの過渡的先駆性は次のような3点に見いだされる。

(1) 近代的労働者についての社会問題への取組み

1860年代のドイツの経済学界においてドイツ・マンチェスター派の自由放

任政策的な理論が支配的であったなかで，シェフレは，近代的経済的発展そのものが不可避的に貧困や社会的反抗や社会主義的運動を生みだすものとして，近代的労働者問題・社会問題のもつ重要な意義をいち早く認めたきわめて少数の例外的な存在であった。

その点，大河内一男氏も，シェフレの『資本主義と社会主義』を，「労資協調思想の伝播に大きな役割をはたした通俗的解説書」とみなしながらも，ランゲの小冊子『労働者問題』と並べて，ドイツ・マンチェスター派と対峙する理論と位置づけ，シェフレを，近代的労働者問題としての社会問題に関心をもった「きわめて少数の例外」[37]的存在のひとりであった，とされているところである。

(2) 社会主義理論への評価と取組み

しかも，シェフレの『資本主義と社会主義』は，1860年代の時期においてドイツの経済学における社会問題についての取扱いがもっぱら社会主義にたいする反対にあったなかで，社会主義の主張と理論にたいして反対の立場をとりながらも，それなりに正面から理論的な取組みをおこなっているのである。

メーリンクも，シェフレが1874年に出した『社会主義の精髄』について，それはランゲの労働問題にかんする小冊子『労働者問題』よりも「おちるもの」とみなしながらも，ランゲの小冊子と並んで「1874年春にブルジョア陣営のなかにあがった警告の声であるもう1冊の本」[38]と評価しており，そのことは同じように『資本主義と社会主義』についてもいえるところである。

そのように，シェフレの『資本主義と社会主義』は，1860年代のドイツにおいて，社会問題にたいして積極的な関心をもち，近代経済において労働者問題のもつ重要性を強調して，社会主義の主張について正面から理論的に取り組んだ，先駆的な業績だったということができるものである。

(3) マルクスへの評価と取組み

さらに，『資本主義と社会主義』の出版された1870年のドイツにおいては，労働運動の指導者および社会主義の理論家としては，ラサールがずぬけた存在とされていて，マルクスの理論はほとんど知られていない状況であった。

そのようななかで，『資本論』第1巻出版の直後の時点において，シェフレは，『資本論』に取り組み，理論的にはラサールよりもマルクスを高く評価しながら，それにたいする批判をおこなっているのである。

そのように，当時ドイツではほとんど知られることのなかったマルクスの理論を積極的に評価して，それについての取組みをおこなったということは，そのかぎりにおいて，シェフレの時代的先駆性をしめしているものとみなしていいものと思われる。

そのような3点を考慮するならば，1870年に出版されたシェフレの『資本主義と社会主義』は，ドイツにおける大きな社会的・思想的・理論的転換期にあって，現実的にも学問的にも過渡的状況にあるなかでの理論的業績として，理論的水準はともかく，時代状況にたいして一定の先駆的意義をもつものと評価してよいのではなかろうか。

〔注〕

1) 島恭彦『財政思想の発展――官僚主義財政学批判――』『経済学全集』第1部（潮流社，1949年）38ページ。木村元一『財政学総論』（新紀元社，1951年）255ページ。斉藤悟郎『歴史学派の財政経済思想』（風間書房，1969年）234ページ。

2) シェフレの主要著書については，主としてA. Schäffle, *Aus meinem Leben*, Bd. 2, Berlin, 1905, S. 244–247に拠っている。なお，参考のためにページ数も入れておいた。

3) A. Schäffle, *Kapitalismus und Socialismus mit besonderer Rücksicht auf Geschäfts- und Vermögensformen: Vorträge zur Versöhnung der Gegensätze von Lohnarbeit und Kapital*, Tübingen, 1870, S. VI.

4) Schäffle, *Aus meinem Leben*, Bd. 1, 1905, Berlin, S. 166.

5) Schäffle, *Das gesellschaftliche System der menschlichen Wirtschaft*, Tübingen, 1867,

Vorwort, S. VII.

6) 斉藤，前掲書，236 ページ。

7) 木村，前掲書，22 ページ。

8) 大河内一男『独逸社会政策思想史』（上）1949 年，日本評論社，172 ページ。

9) Schäffle, *Aus meinem Leben*, Bd. 1, S. 159.

10) Schäffle, *Kapitalismus und Socialismus*, Vorrede, S. VI.

11) Schäffle, *Aus meinem Leben*, Bd. 1, S. 166–167.

12) *Ibid.*, S. 160.

13) Schäffle, *Kapitalismus und Socialismus*, S. 126.

14) *Ibid.*, S. 4.

15) *Ibid.*, S. 308–309.

16) Schäffle, *Aus meinem Leben*, Bd. 1, S. 87.

17) Schäffle, *Kapitalismus und Socialismus*, S.10–11.

18) *Ibid.*, S. 9.

19) *Ibid.*, S. 309.

20) *Ibid.*, S. 309.

21) *Ibid.*, S. 309.

22) 安世舟『ドイツ社会民主党史序説』9 ページ，42–43 ページ。

23) 「マルクスからエンゲルス（在マンチェスター）宛ての手紙」（1870 年 9 月 10 日）『マルクスエン＝ゲルス全集』第 33 巻，54 ページ。*MEW*-33, S. 60.

24) 「エンゲルスからマルクス（在ロンドン）宛ての手紙」（1870 年 9 月 12 日）『マルエン全集』第 33 巻，56 ページ。*MEW*-33, S. 62.

25) 「マルクスからエンゲルス（在マンチェスター）宛ての手紙」（1870 年 9 月 14 日）『マルエン全集』第 33 巻，58 ページ。*MEW*-33, S. 65.

26) マルクス「アードルフ・ワーグナー著『経済学教科書』への傍注」『マルエン全集』第 19 巻，359 ページ。*MEW*-19, S. 360.

27) マルクス『資本論』第 2 巻，『マルエン全集』第 24 巻，631 ページ。*MEW*-24, S. 504.

28) 「エンゲルスからカール・カウツキー（在ウイーン）宛ての手紙」（1881 年 2 月 1 日）『マルエン全集』第 35 巻，123 ページ。*MEW*-35, S. 150.

29) 「エンゲルスからリヒアルト・シュテーゲマン（在テュービンゲン）宛ての手紙」（1885 年 3 月 26 日）『マルエン全集』第 36 巻，261 ページ。*MEW*-36, S. 289.

30) この「時代状況」については，主として，大河内一男『独逸社会政策思想史』（上）（下）（1949–1951 年，日本評論社），F. メーリンク『ドイツ社会民主主義史』（1968–69 年，ミネルヴァ書房），安世舟『ドイツ社会民主党史序説』（1973 年，御

茶の水書房）に拠っている。

31） 大河内，前掲書，（下）402 ページ。

32）「エンゲルスからベルンシュタイン（在チューリッヒ）宛ての手紙」（1881 年 3 月 12 日）『マルエン全集』第 35 巻，139–140 ページ。*MEW*-35, S.170.

33） メーリンク，前掲書，（下）343 ページ。

34） 大河内，前掲書，（上）287 ページ。

35） 同上，（下）402 ページ。

36） 同上，（上）420–421 ページ。

37） 同上，（上）117 ページ。

38） メーリンク，前掲書，（下）343 ページ。